

【臨床・研究】

高齢者の下部消化管内視鏡検査の臨床的検討

いずみ
泉あき お
明 夫

キーワード：高齢者，下部消化管内視鏡検査

要 旨

過去5年間に当院で施行した下部消化管内視鏡検査5241例のうち80才以上の高齢者411例について検討した。主な検査動機は有症状が143例，経過観察が124例，便潜血陽性の精査が117例であった。緊急内視鏡は60例，主な理由は下血が23例，腹痛4例であった。患者背景では心血管，高血圧，脳血管障害，糖尿病などの基礎疾患は332例（81%），抗血栓療法中は108例（26.3%），腹部手術歴は192例（46.7%）であった。診断結果では大腸癌は23例（早期10例，進行13例），癌の占拠部位は右側結腸が10例（43%）であった。その他，ポリープは93例，憩室症は66例，虚血性腸炎8例であった。予定検査での盲腸への到達率は95.5%であり，所要時間は10.3±7.4分であった。内視鏡の前処置，検査に伴う偶発症はほとんどみられなかった。下部消化管内視鏡検査は高齢者においてもその特性を考慮して慎重に行えば安全に施行できると考えられ，高齢者では右側結腸の癌が多く全大腸内視鏡検査が望まれる。

はじめに

2012年10月1日現在，日本の65才以上の高齢者は総人口の24.1%であり，今後も高齢化率はさらに上昇し，2060年には39.9%になると推測されている。島根県では高齢化率はさらに高く，2012年の65才以上の高齢者は30.0%である¹⁾。

このような高齢化社会と大腸癌の増加，大腸疾患への関心の高まりを背景に，近年高齢者の下部

消化管内視鏡検査を施行する機会が増加してきた。

高齢者では老化した臓器に基礎疾患を有する患者が多く，検査に伴う偶発症に注意をする必要がある。また，下部消化管内視鏡検査では上部消化管内視鏡検査に比べ，患者への負担が大きく，検査医は内視鏡検査の受容性を高めるとともに，安全な検査を施行することが求められている。

高齢者の基準は一定ではないが，本稿では内視鏡検査を行う上で通常よりいっそうの配慮が必要な年齢との観点から80才以上を高齢者とした。

今回当院で経験した下部消化管内視鏡検査症例を臨床的に検討し，高齢者の特徴と検査の留意点

Akio IZUMI

泉胃腸科医院

連絡先：〒690-0876 松江市黒田町94-9